おおさか KEYわーど 第23回

句碑の散策 〝春また春〟にはいかが

蕪村の碑

春になると、決まって与謝蕪村（1716～1784）の「春風馬堤曲（しゅんぷうばていのきょく）」を思う。

蕪村は、江戸中期を代表する俳人であり、画家としても名高い。俳句では、芭蕉を理想とした中興俳諧の中心となり、「春の海　終日（ひねもす）のたりのたり哉」「牡丹散りて打かさなりぬ二三片」「菜の花や月は東に日は西に」などの句が有名である。絵画では「夜色楼台図」や、小説家の川端康成が愛蔵した池大雅との競作「十便十宜図」がともに国宝、「奥の細道画巻」（逸翁美術館）が重要文化財に指定されている。平成13年に大阪市立美術館で開催された特別展「蕪村～その二つの旅～」をご覧になった方も多いだろう。

蕪村の故郷は、摂津国東成郡毛馬村（現大阪市都島区毛馬町）である。毛馬村は、明治時代に新淀川を開削したときに川底に水没し、蕪村時代の旧跡を訪ねることはできないが、新淀川の堤防に蕪村を記念した碑が建つ。

出生に関する複雑な事情もあったらしく、蕪村は青年時代に故郷を去って江戸に下り、俳人の早野巴人（はやのはじん）に師事して俳諧を学んだ。師匠の没後は知人を頼って北関東を遊歴し、36歳になって京都にまで戻ってくる。その後も丹後の宮津や讃岐に長期滞在することはあったが、生涯を京都で過ごし、大坂に来ることはあっても、ふたたび毛馬に戻ることはなかった。

「春風馬堤曲」は、感覚の斬新さから近世文学の奇跡ともよばれる。「馬堤」は“毛馬の堤”を漢詩風に表現したもので、帰ることのなかった故郷への想いを、大坂に奉公に出た少女が帰省する物語として、十八首で構成する。門人あての手紙に「愚老、懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情にて候」と記すように、懐かしさのあまりうめき出たのが「春風馬堤曲」だった。

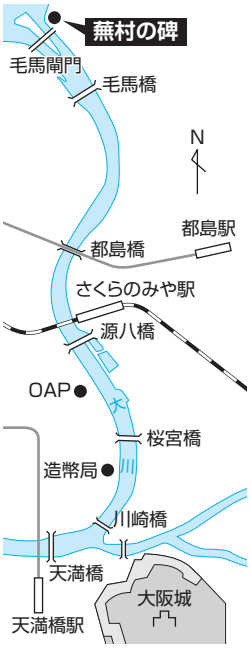
十八首の最初の一首が「やぶ入や浪花を出て長柄川」。長柄川は、新淀川の原型となった中津川のことで、二首目は、堤防がつづく景色へと目を転じて「春風や堤長うして家遠し」となる。さわやかな春風が吹いてはいるが、堤の道は長く、家までは遠い。

途中にある茶店のおばあさんが「元気そうでなにより」とよろこび、故郷に錦を飾るための春着も褒めてくれる。春の草が萌える三叉路を進むと、黄色と白色のたんぽぽの花がたくさん咲いていて、この道をとおって奉公に出た日の記憶がよみがえる。たんぽぽを摘むと、折れた茎から流れ出た白い乳が、やさしい母を思わせる。「むかしむかししきりにおもふ慈母の恩 慈母の懐袍別（かいほうべつ）に春あり」、母親のふところに抱かれていると、そこに春のあたたかさがあったのである。

しかし「春あり成長して浪花にあり」、少女は成長して大坂に出る。そして「梅は白し浪花橋邊財主の家 春情まなび得たり浪花風流（ぶり）」、難波橋（浪花橋）あたりの裕福な商家に奉公したのだろう。都会のセンス（浪花風流）に染められていく自分に気がつく。しかしまた、家族を捨てたように都会に出たことを後ろめたくも感じている。そんな想いが錯綜しながら、やがて再会の時が近づいた。「故郷春深し行々（ゆきゆき）て又行々（ゆくゆく）」。堤の道を下って春色の深い故郷に帰りつくと、黄昏の家の前に、弟を抱いて自分を待ってくれている母親の姿があった。“春また春”である。

故郷を目の前にしながらも決して帰り得なかった蕪村の想いが「春風馬堤曲」には美しく凝縮されており、詩人の萩原朔太郎は昭和11年に『郷愁の詩人 与謝蕪村』を刊行した。現代の大阪は、こうした美しい故郷のイメージを育んでいるのだろうか。

ところで春になって日が長くなると、私の場合、「春風や堤長うして家遠し」とうそぶきながら、なかなか帰宅せず、“毛馬胡瓜”など復活したなにわの伝統野菜を用いた酒肴を求めて、街をほっつきまわるわけだが、今年は気もちが異なる。昨年3月の東北を襲った大震災と原子力発電所の事故によって、故郷を失い、肉親を失い、自宅に戻りたくても戻れない人たちがたくさんいる。昨年の今ごろ、親友の家族も東北から大阪へ一時避難していた。「春風や堤長うして家遠し」は、原作の意図とは別の意味で、現代の日本人の心をうつフレーズかもしれない。



筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。